

佳作

私のコウノトリ

平安 ころろ(ペンネーム)様

『オギャー、おぎゃー。』

「ああ、疲れた。今日はふたりの赤ちゃんをとりあげたよ。」と彼女の電話口の声。

「そう、ならドーチカする?」と私。

「うん、いつもの所で待っていて。」

ドーチカのコーヒー店で待っているあいだに……私は28才の頃にふと戻っていた。あの頃、彼女が産まれた。私の中から心はエネルギーに満たされていた。うれしかった。

男の人生でいつの時代が最も幸せなのだろう。多分、我が子が生まれて、この子の為に「なにくそ、頑張るぞ。」と思えたときではないか。私のまわりの世界は輝いていた。妻も幸せそうだった。

「待った?お父さん。」彼女の声で引き戻される。「私はドーチカでリセットするのが好き。」と彼女。今は助産師をしている。ドーチカには、気さくな店が多い。私はこの通りを歩くのが好きだ。私には少し幸せが舞い込んでくる気がするから。